

2019年12月20日

第7回 全国外大連携プログラム 通訳ボランティア 育成セミナー

報告書

主催

全国外大連合

開催日程

2019年8月28日(水)～30日(金)

開催場所

神田外語大学(千葉県)

特別協力

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

後援

東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部

文部科学省 外務省 観光庁 東京都 千葉県

公益財団法人 ラグビーワールドカップ2019組織委員会

公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会

NPO法人 日本オリンピック・アカデミー

一般社団法人 全国外国語教育振興協会

目次

1. セミナー概要	…p.3
1-1 大学別の事前申込者数と受講者数	
1-2 学年別受講者数	
1-3 男女別受講者数	
1-4 対応可能言語	
1-5 第1回～第6回までの受講者数推移	
1-6 大学別の人材バンク登録者数	
2. 学生の参加動機	…p. 6
2-1 参加目的	
2-2 参加へのきっかけ	
3. 参加後の自己評価	…p. 7
アンケートによる集計	
4. 各講義内容について	…p. 9
講義名	
講師名	
参加者課題『講義レポート』より	
5. セミナーの様子(写真)	…p. 34

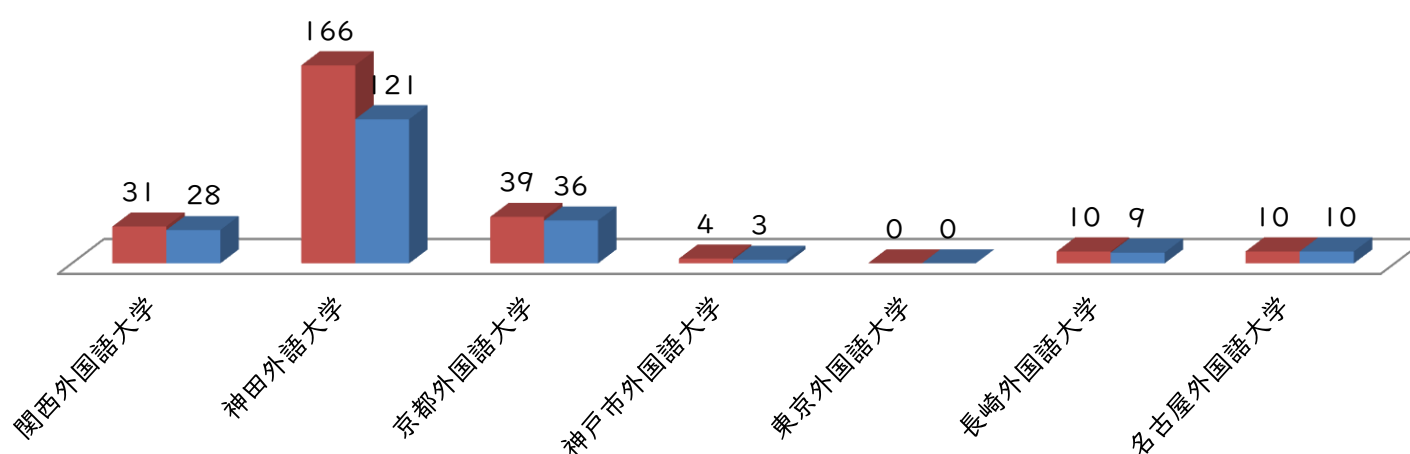
1. セミナー概要

1-1 大学別の仮申込者数と受講者数

単位:人

大学名	仮申込者数	募集枠 (英語)	募集枠 (英語以外)	当日受講者数	バンク登録者数
関西外国語大学	31	20	各言語40名 ・中国語 ・韓国語 ・スペイン語 ・ポルトガル語	28	22
神田外語大学	166	120		121	90
京都外国語大学	39	20		36	25
神戸市外国語大学	4	20		3	3
東京外国語大学	0	20		0	0
長崎外国語大学	10	20		9	6
名古屋外国語大学	10	20		10	10
合計	260	240	160	207	156
		400			

仮申込者数と当日受講者数

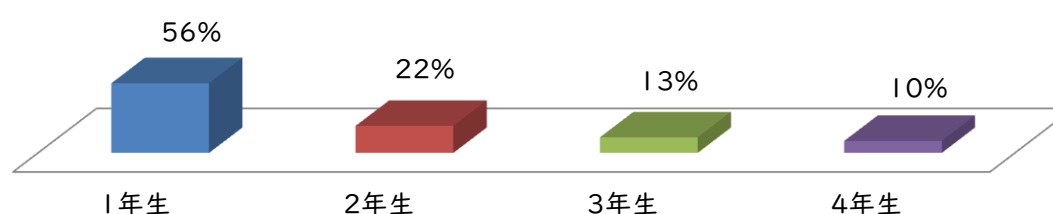


1-2 学年別受講者数

単位:人

大学名	BASICコース		INTERMEDIATEコース		大学別計
	1年生	2年生	3年生	4年生	
関西外国語大学	0	13	8	7	28
神田外語大学	89	17	10	5	121
京都外国語大学	25	5	1	5	36
神戸市外国語大学	0	2	0	1	3
東京外国語大学	0	0	0	0	0
長崎外国語大学	0	5	4	0	9
名古屋外国語大学	2	3	3	2	10
学年別計	116	45	26	20	207

学年別受講者数

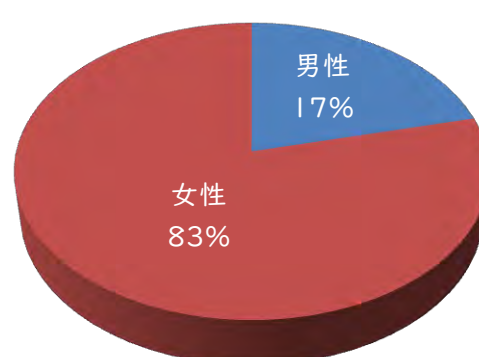


1-3 男女別受講者数

単位:人

大学名	男性	女性	大学別計
関西外国語大学	9	19	28
神田外語大学	13	108	121
京都外国語大学	18	18	36
神戸市外国語大学	1	2	3
東京外国語大学	0	0	0
長崎外国語大学	3	6	9
名古屋外国語大学	0	10	10
男女別計	44	163	207

男女別受講比率

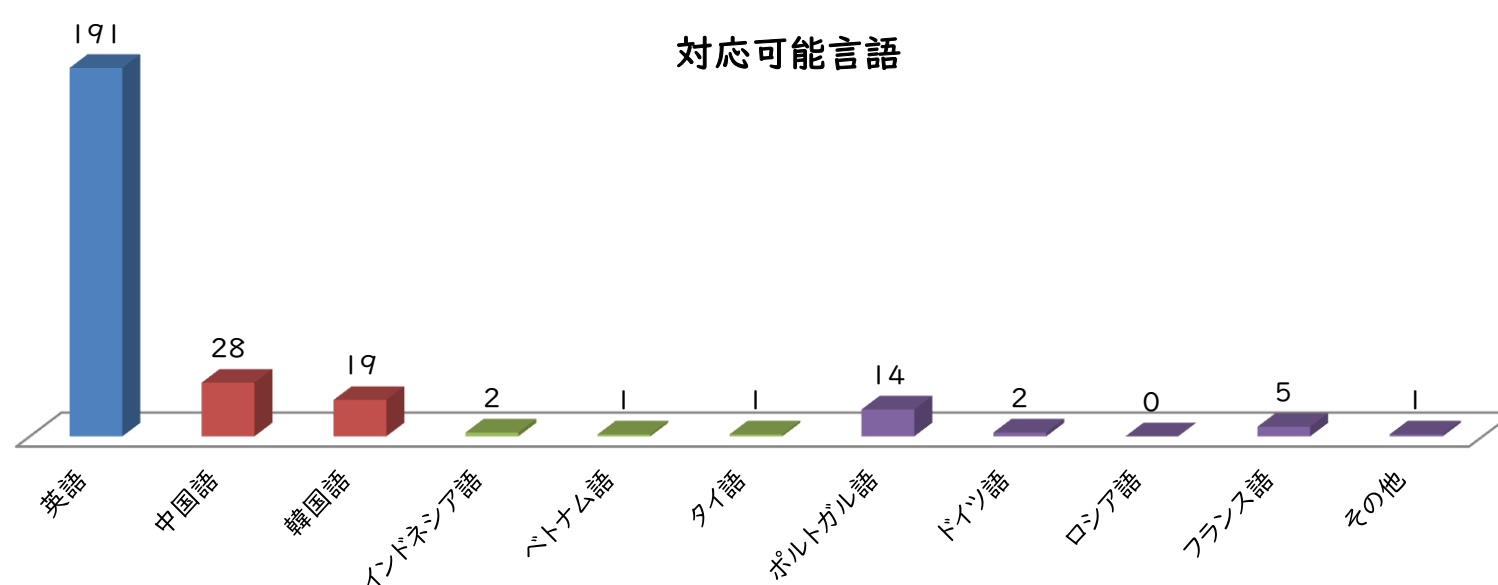


1-4 対応可能言語

単位:人

英語	中国語	韓国語	インドネシア語	ベトナム語	タイ語
191	28	19	2	1	1
スペイン語	ポルトガル語	ドイツ語	ロシア語	フランス語	その他
24	14	2	0	5	1

※受講者の対応可能言語内訳を示す。



1-5 第1回～第7回までの受講者数推移

単位:人

大学名	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	各大学 総受講者数
関西外国語大学	27	24	29	46	34	24	28	212
神田外語大学	119	120	220	17	221	324	121	1142
京都外国語大学	27	21	54	60	55	24	36	277
神戸市外国語大学	9	4	5	8	0	3	3	32
東京外国語大学	6	1	0	0	4	0	0	11
長崎外国語大学	21	13	29	11	22	26	9	131
名古屋外国語大学	27	14	30	36	20	23	10	160
回毎の受講者数	236	197	367	178	356	424	207	1965
受講者数推移(延べ数)	236	433	800	978	1334	1758	1965	

1-6 大学別の人材バンク登録者数(第1～7回開催分総計)

単位:人

大学名	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	各大学 総登録者数
関西外国語大学	27	24	29	39	33	22	22	196
神田外語大学	106	111	204	4	159	281	90	955
京都外国語大学	27	21	53	47	49	23	25	245
神戸市外国語大学	9	4	5	6	0	3	3	30
東京外国語大学	4	1	0	0	4	0	0	9
長崎外国語大学	20	13	25	6	18	25	6	113
名古屋外国語大学	26	14	30	24	19	23	10	146
回毎の登録者数	219	188	346	126	282	377	156	1694
登録者数推移(延べ数)	219	407	753	879	1161	1538	1694	

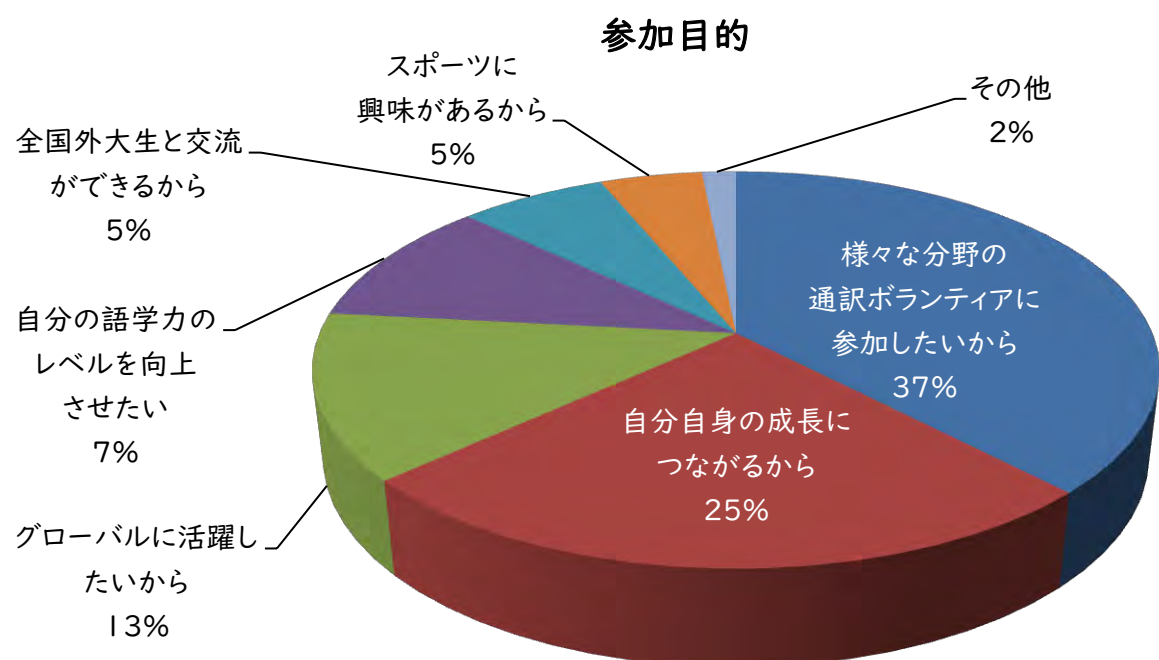
2. 学生の参加動機

2-1 参加目的

単位:人

参加目的	回答数
様々な分野の通訳ボランティアに参加したいから	73
自分自身の成長につながるから	49
グローバルに活躍したいから	26
自分の語学力のレベルを向上させたい	20
全国の外大生と交流ができるから	13
スポーツに興味があるから	9
その他	3

回答者数:193人

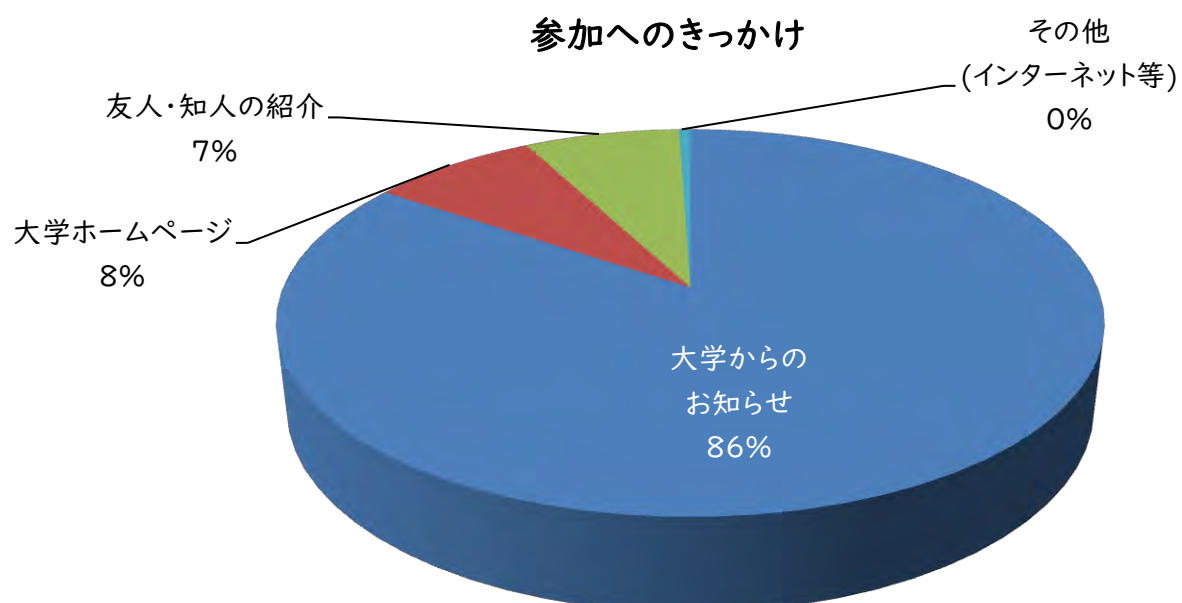


2-2 参加へのきっかけ

単位:人

参加へのきっかけ	回答数
大学からのお知らせ	163
大学ホームページ	15
友人・知人の紹介	14
新聞記事	0
その他(インターネット等)	1

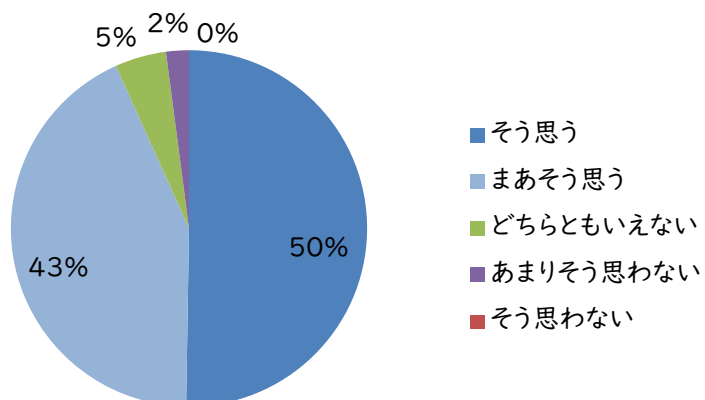
回答数:193人



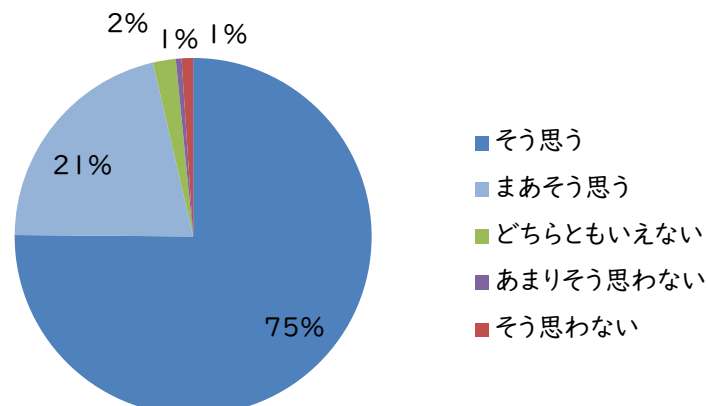
3. 参加後の自己評価 — アンケートによる集計(単位:人)

回答者数: 193人

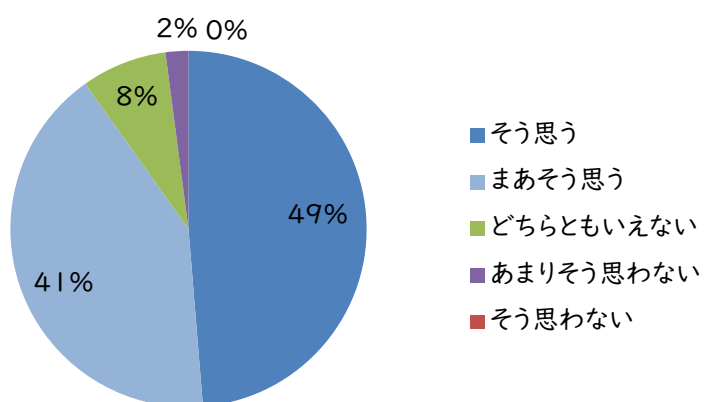
1. セミナーを受講してグローバル人材とは何か
そのために何をすべきかが明確になった



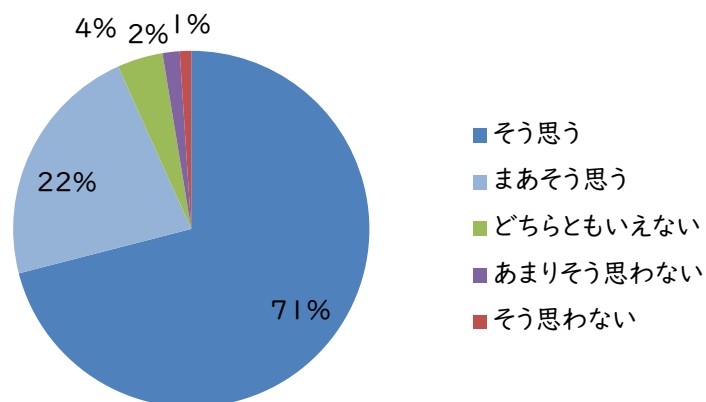
2. 語学力とコミュニケーション力の
必要性について学ぶことができた



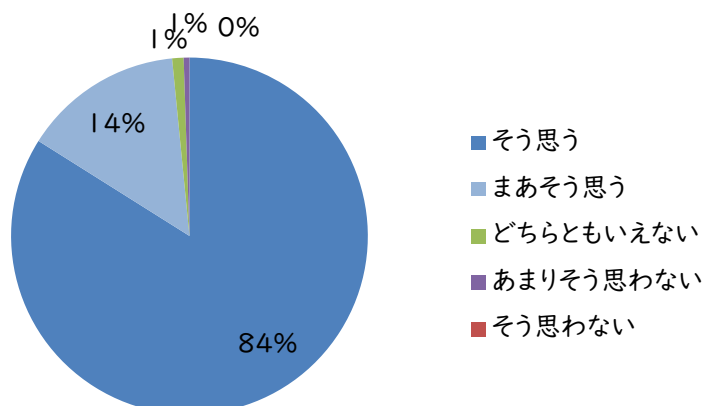
3. スポーツを取り巻く多様な分野や
専門知識の理解が深まった



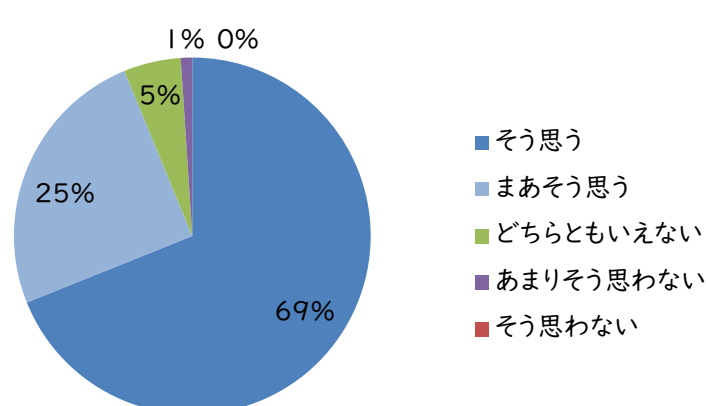
4. 参加する前より語学を学ぶ意義と
学習意欲が高まった



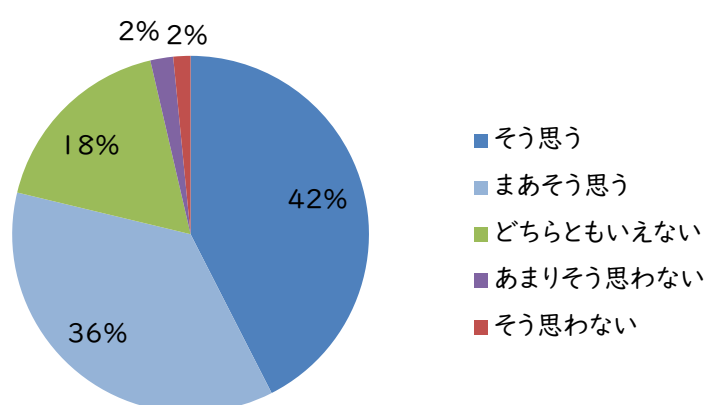
5. 今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より
積極的にチャレンジしてみたい



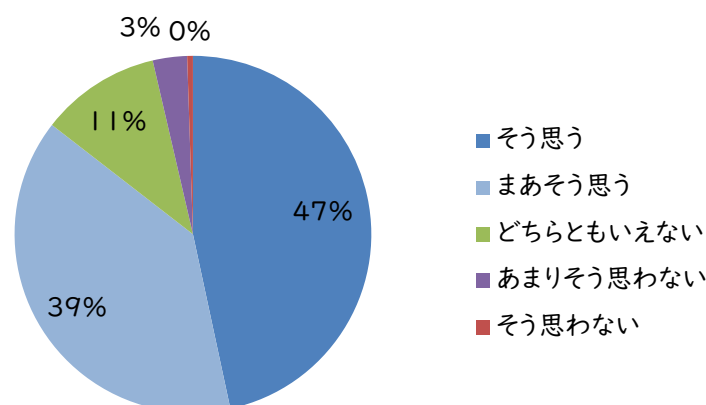
6. 受講前よりスポーツを通じて
異文化・国際交流に興味を湧いた



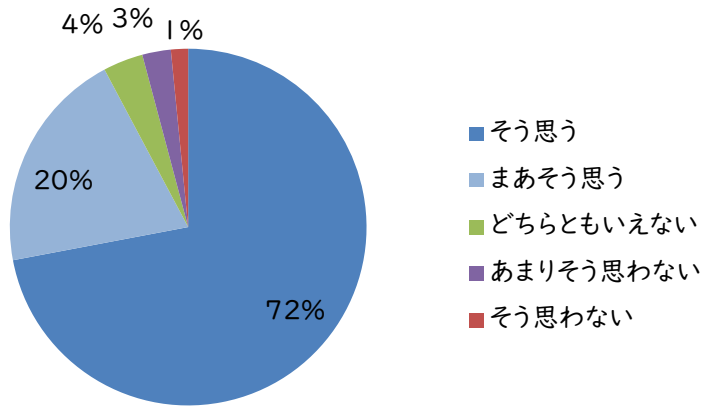
7. 日本人としてのアイデンティティについて考えるよ
うになった



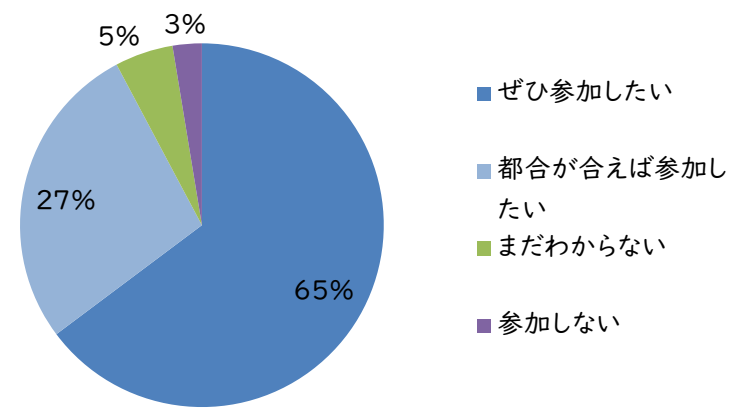
8. 自分の興味・関心がある分野に気付き、
新たな自分を発見した



9. このセミナーを受講して満足している



10. 将来、東京2020オリンピックパラリンピック競技大会に、通訳ボランティアとして関わりたいか？



11. 『このセミナーを通してのご感想やご要望、ご質問、運営についてお気づきの点等ご記入ください。』への回答内容

回答内容	回答件数
有意義な3日間だった、楽しく学べた、貴重な時間、満足	25
新たな気づきがあった、刺激があった、視野が広がった	16
実践・実用的な講義や通訳の実践演習等がほしい	14
普段関わることのない方の講義が聞けてよかった	9
様々な外大生との交流が深まった	7
講義間の移動時間や、講義時間の調整が必要だと思う	5
アイデンティティーについて考える機会となった	2
積極的に学ぶこと、行動することの大切さを知った	2
難易度を調整してほしい(中国語、医療通訳)	2
ボランティアに興味、意欲がわいた、モチベーションが上がった	2
他大学の学生ともっと交流したい	2
グローバルな視点でどうアクションするかまで話を聞きたい	1
懇親会が楽しかった	1
他大学の参加態度が気になった	1
東京2020通訳ボランティアに参加する機会がほしい	1
もっと多くの大学とも連携してほしい	1

※上記「回答内容」に当てはまる回答を「回答件数」としてカウント。

回答件数合計:91件

4. 各講義内容について

8/28(水)	特別講演
講演者	スポーツ庁 長官 鈴木 大地



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆この講義から、オリンピックの歴史、鈴木 大地講師の偉大な功績、そしてオリンピックを通じて国際交流や世界平和に繋がるということを知った。鈴木大地講師が現役のオリンピック選手だった頃、多くの外国の水泳選手たちが鈴木大地講師に泳ぎ方の指導を頼み込んだ。そして、講師は多くの外国人選手に、講師独自の泳ぎ方を伝授した。このように、言語が異なっても、1つのスポーツをきっかけに交流ができるということを知った。そして、英語や外国語を流暢に話せるだけでは意味がないと感じた。実際、鈴木大地講師の泳ぎ方を教えるという目的と、外国人選手の泳ぎ方を教わりたいという目的が重なったことで、国際交流がなされた。このことから、スポーツとは見て楽しむ、サポートして楽しむ、実際に参加して楽しむというだけではなく、スポーツを通して様々な国の人たちと繋がることができる偉大なものと学んだ。そして、スポーツを楽しむことに国境はないということを感じた。(神田外語学院・2年)

◆”スポーツ”とは何なのか、スポーツの意義について改めて考える良い機会だった。実際に世界で活躍している人による講義は説得力があり、自分もこんな風になりたいと思った。特に、鈴木さんのスポーツに対するパッションが強く伝わった。(関西外国語大学・2年)

◆まず、セミナーの話者がスポーツ庁の長官であることがいちばんの驚きだ。人生を成功させた人物の講義を受けるのは初めてだった。更に人生をどのようにしていいものにするか、またこれからの人生に役に立つことを色々吸収できた。講師はオリンピック選手であり、その時の経験からの話も沢山聞くことができた。この通訳ボランティアセミナーでしか体験できないことを初めから体験できて、とても満足だった。それに加えて、やはり英語を通じて色々な経験が出来ることを教えていただいた。自分は人よりは英語を理解することが出来るのでそこを自分の長所と再認識する事ができた。短い講義ではあったが他のものに劣らない講義であった。(長崎外国語大学・3年)

講師

筑波大学 教授
東京2020オリンピック・パラリンピック組織委員会参与
真田 久



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆聖火ランナーの歴史的な重要性を学んだ。昔は早く走れば走るほど良いとされていて、トーチレースで1番になった者は祭壇での協議に関わることができた。しかし、現在はスポンサーの影響で聖火ランナーはゆっくり走ると聞いて、これからの先の聖火ランナーもその時代の状況とともに変わっていくだろうと思った(地球温暖化など)。

また、オリンピック開催をすることは大変なことだと感じた。聖火を運ぶことに国際的な理解を得て、専用の航空機を準備しなければならないと聞いて、多くの人の協力があってこそそのオリンピック開催なんだなと思った。(関西外国語大学・4年)

◆古代ギリシャでは火を大切にしていたことがわかった。また、火の神様がいたことについて、自然物に対して神様がいてという考えが、日本人のアニミズムに似たものを感じた。

聖火リレーに神に仕える人を決めるという意味があるということを知った。1964年の聖火リレーのルートを見ると、当時の国同士の関係や日本の状況が関係していることがわかり興味深かった。(神田外語大学・2年)

◆聖火の歴史、聖火に対する人々の、平和へつなげる火を絶やさないという思いを理解した。古代ギリシアから続く聖火リレーは、現代の形になったのは近代だが、聖火をつなぐことには変わりなかった。近代の聖火リレーは国をまたぎ、聖火が運ばれる。戦争中だった国にも説得をし、聖火を運んだ。どんなことがあっても聖火をつなぐことで、聖火を絶やさず、運びきることがいかに大切か分かった。2020東京オリンピック聖火リレーも日本全国を回る。日本全国をつなぐという意味でも人々が聖火リレーに対する「つなぐ」意味を示しているのだと考えた。私も、人々をつなぐ役割として、通訳ボランティア活動をするつもりだ。(名古屋外国語大学・2年)

8/28(水)

パラリンピック理解

講師

公益財団法人日本障害者スポーツ協会
日本パラリンピック委員会参事
中森 邦男



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆It's ability and not disability that counts.(失ったものを数えるのではなく、残された可能性を生かそう。)という言葉が響いた。障害者を含めた社会実現を目指さなければならない。(京都外国語大学・1年)

◆パラリンピックについて豊富な知識を持ち、いろいろな資料や映像を交え、様々な視点からパラリンピックの話をしていただいた。特にオリンピックと比較しながらのパラリンピックの歴史・軌跡を聞くと、当時のオリンピックを知るものからすれば、ずっと昔からあったパラリンピックも、知名度が出てきたのはごく最近のことなのだと理解できた。(神戸市外国語大学・2年)

◆競技によって参加できる障がいが決まっており、障がい者全体から見た病状全部が対象になっていないことを知った。意外だったのは第1回大会のローマ大会の次に第2回が東京で開催され、日本チームがリハビリのつもりで参加したらスポーツにより体力の回復、精神状態も良くなり、前向きになり、自分に自信がつくことが何よりの功績になるということだった。私はパラリンピックスポーツの素晴らしさを知り、どんな重い障がいがあってもルールの工夫と私たち健常者のサポートがあれば、社会のバリアを減らした世界が実現できると思った。(名古屋外国語大学・3年)

講師

社会福祉法人 太陽の家 理事長
山下 達夫
 三菱商事太陽株式会社 社長
福元 邦雄
 神田外語大学 学長
宮内 孝久



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆私はこの講義から、パラリンピアンの方の偉大さ、障害者と健常者の間にある微妙な捉え方の違い、そして、コミュニケーションの難しさを知った。私が特に印象に残っていることは、お三方と我々学生たちのディスカッションである。ある1人の学生が、障害を持っている人どのように接すれば良いかわからないと言った。太陽の家 理事長 山下達夫さんによると、障害者も健常者の人と同じように自分のことは自分でやりたい。そして、障害を持っているからといって、常にサポートしようとしなくていい、とおっしゃった。たしかに自分1人ではできないことがあるが、ほとんどは自分でできる。もしできないときは助けてもらう。だから、障害者だからという理由で接しなくて良いとおっしゃっていた。そして、障害者の方たちは健常者の方たちよりも優れているところが沢山あるということを知った。また、太陽の家なんか無くなれば良いという言葉が衝撃的だった。しかし、説明を聞いてとても納得した。障害者と健常者というふうに雇用や学生を分けていては真の共生ではないと私も考える。そして、今回の講義により、より具体的に共生のあり方や、共生の未来を考えるようになった。(神田外語学院・2年)

◆私は、事前課題を提出した際は、共生社会の難しさばかりを考えていたが、山下理事長らのお話を伺う中で、障がい者を個性として考え、健常者に得意、不得意があるように、障がいを持った人にも得意、不得意があり、それを周りが理解して補い合うことで、共生社会は可能だと、よりポジティブに考えることができるようになった。実際に健常者より多くの助けがあるのかもしれないが、それは誰にでも起こり得ることで、私も日頃たくさんの方に支えてもらっているように、今健康な私が得意としている、できることをやれば、それが共生社会をより可能にするのだと気付くことができた。(関西外国語大学・2年)

◆中村裕博士の「保護より機会を」という言葉を聞いて、正にその通りなのだと思った。どの授業で見たのかは不確かだが、リオのパラリンピックの” Yes, I Can” のビデオを見て驚いた。ビデオの中で障がい者は健常者と何も変わらずドラムを叩いていたし、スポーツをやっていた。障がい者を保護して何もやらせないというのは違うのだと思った。健常者と障がい者の相互の理解がとても大切だと思った。そして理解のためにはコミュニケーションが必要だと思った。(神田外語大学・2年)

講師

ロービジョンフットサル 日本代表キャプテン

岩田 朋之

ファシリテーター

筑波大学 客員教授、札幌国際大学 客員教授

江上 いずみ

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆この講演の中で印象深い言葉は「本人を見ても障がい者だとはわからないひとは、見てわかる障がい者の人より世の中から置いて行かれる」だ。私は電車で妊婦さんやお年寄りが乗ってくると席を譲る。しかし、見た目でも異常がなければ席は譲らない。この講演で、見た目ではわからないハンディキャップを持った人は誰も気遣ってくれないのではないかと思った。わたしはそんな人に気づく人間になりたい。

(京都外国語大学・1年)

◆岩田氏の人生は波瀾万丈である。高校生の時には胸上げで大けがをし、大学ではうつ病のようになり、そして新たな目標を見つけた矢先の目の病気。そんな過酷な環境の中でも、岩田氏はロービジョンフットサルという競技を見つけ、そこでやりがいを見出していく。そして今や、日本代表チームのキャプテンを務める岩田氏。元気さや明るさだけでなく、ユーモアや話術にもたけ、話に引き込まれ、あっという間に時間が過ぎた。ファシリテーターの江上氏も、あうんの掛け合いで、ミーハー的な質問を投げかけつつ、話を盛り上げていた。

(神戸市外国語大学・2年)

◆私はこの講義を通して、諦めないことの大切さと柔軟な考え方を持つことの大切さを学んだ。講師はソムリエになりたく、一生懸命努力をしていたが、後天性の病気で視力がなくなり、ロービジョンサッカーに転向した。普通であれば自分が病気だと気づくと、うつ病になったり、ネガティブな思考を持つ傾向があるが、講師はしっかりと克服し、柔軟な考え方で、パラリンピック選手まで上り詰めた。物事に対する視点が違ふとそのこと自体もそれぞれに意見があることが再確認できた。自分自身がポジティブになることで考え方もポジティブになり何事に対しても上手いく傾向がある。今回の講師は目がほとんど見えなくなったことをネガティブな思考を持たず、ましてやチャンスとして活かした。このように、柔軟な発想を持ち、ポジティブになることで人生を有利に進めることができると学んだ。(長崎外国語大学・3年)

8/28(水)

ラグビーワールドカップ2019理解

講師

(公財)ラグビーワールドカップ2019組織委員会
事務総長特別補佐(当時)
徳増 浩司



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆ラグビーワールドカップの日本開催に、これほどまでの情熱と年数をかけて取り組んで来られた方がいたと知り、思わず息を呑んだ。ひとつの大会に、こんなにも力を注いできたことへの尊敬と、自身にそういったものが果たしてあるのかどうかということも思った。開催に向けてどういった働きかけをしてこられたか、またその中で失敗してきたことも含め、たくさんの経験をお話くださり、ありがたく思った。

グローバル人材になるにはまず「個」を大切に、「人と違う」ということが個性であることを理解する。また自分の考えをしっかりと伝えること、そして“enjoy”が意味するのは「力を出しきる」ことである。

穏やかな口調からも熱いメッセージを確かに受け取ることができた。ラグビーには疎かったが、徳増氏を知ったことをきっかけに今後注目したい。

(神田外語学院・1年)

◆日本でようやく開催されるラグビーのワールドカップについて講義を受講した。大阪の花園競技場も試合で使用されるので終始親近感を抱かせてもらいつつ有意義な講義参加となった。自身の過去の海外経験にも触れられていて異文化理解や「enjoy」とは果たして何なのかといったグローバルな視点で物事を考えられている姿勢が素晴らしかった。

「日本の常識は世界の非常識」とよく聞くので今一度異国の文化だけでなく自国の文化を見つめなおす必要があると感じた。

(関西外国語大学・3年)

◆徳増さんがおっしゃった「コミュニケーションしよう」とする気持ちや、「好きなこと」を大切にしよう、失敗もエンジョイする気持ちで、などの話を聞き、自分の今までの英語学習に対する考え方が変わり、もっと積極的に楽しく英語を勉強しようと思えるようになった。

(京都外国語大学・1年)

講師

一般社団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 マーケティング統括室

貴島 和美

神田外語大学卒業生 2018平昌冬季オリンピックボランティア参加者

長尾 滉

神田外語大学卒業生 JR東日本東京駅ボランティア参加者

真壁 ひとみ

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆私が一番心惹かれた言葉は真壁さんの「できないことはできないという、できなくていい、しようとするやる気大切」という言葉だ。私は英語が得意ではないが外国語大学に入学した。周りはTOEICの高得点の人ばかりで、いつも自分の成績と比べて落ち込んでいた。何で私もあの人たちと同じようになれないのだろうか、外国語大学に入ったのに英語が話せないなんて恥ずかしいと何回も悩んだことがある。でも真壁さんのお話を聞いていたら、できないことが恥ずかしいのではなく、できないのにできるということ、自分はこのができない、できるを主張できないことが恥ずかしいことなのかなと思った。最近、外国人の人に観光案内をする通訳ボランティアがあったので、真壁さんの言葉を思い出し、簡単な英語でもジェスチャーや笑顔でコミュニケーションを図った。外国の方はとても大らかな人ばかりで、私の英語でもきちんと聞いてくれた。初対面の人でも仲良い人でも会話は笑顔から始まり笑顔で終わるんだなと実感した。笑顔は簡単なようで難しく、とても大切なものであることに気づくことができた。また通訳ボランティアなどがあれば笑顔を忘れず、積極的に英語を話したいと思った。(京都外国語大学・1年)

◆通訳等国際的なボランティアをするにあたって、日本人として出来ることを身につけ、グローバル人材となることが重要だと考えた。海外でボランティアをすると、個人としてだけではなく、日本人としても見られる。そのため、日本人として恥じない言動をし、自分の能力を発揮する必要があると思った。また、一個人として、コミュニケーション力、多様性を受け入れる力、決断力・判断力のあるグローバル人材になり、海外で活動をする必要がある。そのために、普段からの学習、自らの行動力を向上させる必要があると思った。(名古屋外国語大学・2年)

◆国際スポーツボランティアに参加するにあたり、いろんな準備や知識、行動力が必要になってくるのではないかと思う。コミュニケーション力はもちろん、他国の文化や習慣の違いを受け入れる多様性も必要になってくることに気づくことが出来た。自分にそういった力があるかどうかは分からないが、参加する際には少しでもそういった能力を向上させていきたいと思う。また、言語だけでなく、プラスαがボランティアを行うにあたり大切になってくると述べられており、確かに言語を習得しただけでは他者に物事を伝えることが出来ないなと思った。その場で対応できる力もこれから身につけていくべきだと改めて考えた。(神田外語大学・2年)

8/29(木)

おもてなしと異文化コミュニケーション

講師

筑波大学客員教授
グローバルマナーズプリングス代表
江上 いずみ



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆丁寧な対応は、細かいことにも気を配る必要がある。そして、カップを渡した後の対応の違いだけで、お客様の気持ちは良い方向にも悪い方向にも傾くということが分かった。(神田外語大学・2年)

◆江上先生の講義により、人をもてなす際には何よりも言葉が大切だと分かった。言葉次第で相手に好感を与えることも、相手の機嫌を損ねることもできると改めて感じた。今後の就活等のためにも講義で学んだルールやマナーを実践していきたい。(京都外国語大学・1年)

◆世界で活躍するJALの方からのお話はとても貴重で、基本的なマナーから、ビジネスの場でも役立つ挨拶を学べて良かった。ぜひ自分のものにしていきたいと思う。(関西外国語大学・2年)

8/29(木)

アドベンチャーコミュニケーションプログラム (ACP)

講師

神田外語大学 教授
 体育・スポーツセンター長
市瀬 良行

神田外語大学 講師
江川 潤



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆作業やゲームなどのコミュニケーションを通して、関係性がいかに良好にいきやすくなるかを実感した。

私たちは、小さい頃は意識せずともこの事ができていたのに、年齢を重ねるごとに難しくなっているんだなと感じた。また、自分から心を開くと、多くの人(セミナーに来ているよな意識をしている学生は全員)はそれに応えてくれるということを感じた。始めにその様なアクティビティを取り入れることで、それ以降の講義や出来事にも多く影響すると感じた。(関西外国語大学・4年)

◆この講義を通し、より客観的にコミュニケーションの取り方を学んだ。また、リーダーシップとフォロワーシップを学んだ。

この講義で私は、同じグループの10人と一緒に様々な実践的なコミュニケーションプログラムを行った。

その中でも私が特に印象に残っているものは、グループ全員で1つのブルーシートの上に乗し、誰一人落ちないようにひっくり返すというものだ。ブルーシートは11人がギリギリ乗れる程度の大きさのため、誰も落ちないように全員で協力する必要がある。そして、最終的には誰一人落ちることなく、ブルーシートをひっくり返すことに成功した。成功した後に振り返ると、ブルーシートをひっくり返すために、一人のリーダーが積極的にアイデアを実証し、残りのフォロワーはアイデアを寄せ合い、リーダーをサポートしていた。このプログラムを通し、私たちが気づかずに行なっている行動にもコミュニケーションや、リーダーシップ、フォロワーシップが存在していることに気がついた。また、その役割を把握し、主体的に協力することはこれからの私にとってもとても大切なものだと考える。

(神田外語学院・2年)

◆体育館での、体を動かしての研修だった。名前も知らないような間柄の相手とでも、環境さえ整えば、目的を共有したり、お互いに前向きになったりしつつ、コミュニケーションをはかることができることを学んだ。(神戸市外国語大学・2年)

8/29(木)

組織とリーダーシップ

講師

NPO法人 CRファクトリー 代表
呉 哲煥



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆グループやチームのリーダーをする際に抱えていた悩みの答えをいただけたような気分で講義を受けられた。私はリーダーになった際、周囲を巻き込んでやるのが苦手で、結局自分自身がいろいろ動いて、負担が大きくなってしまっていた。しかし、目的や方向性をメンバーと共有し、適するタスクをメンバーに担ってもらい、考えてもらうこと、そして、メンバーとコミュニケーションを取り、居心地の良い空間を作るといった3つのポイントをうまく利用することにより、リーダーの孤立はなくなるのだと学ぶことができ、良かった。(関西外国語大学・4年)
- ◆コミュニティをどのようによくしていくべきかということ学べた。ボランティアは他のボランティアの人たちと協力して作っていくものだと思うからどのように同じ目標に向かって頑張っていくか、ということを知ることができた。(神田外語大学・3年)
- ◆自分自身が中高と、委員会の長として活動してきたため、この講義は一番自分と照らし合わせて受けることができた。人を率いることのできるリーダーとはどのような人物なのかについて考えさせられる時間だったので、もっと早くこの講義に出会っていたらまた変わっていたのかなと感じた。(名古屋外国語大学・1年)

講師

神田外語大学
ボランティアセンター部長(当時)
篠村 勉



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆スポーツは単に楽しむだけだけでなく、経済をも動かすことを学んだ。東京オリンピックによって大きくいい方向に日本経済が動いてくれることを期待している。(京都外国語大学・1年)
- ◆スポーツはスポーツであり、今までスポーツをビジネスと結び付けて考えたことがなかったので新しく自分の中で興味深いジャンルが出てきたなと思った。オリンピックのスポンサーのことも考えたこともなく、会社のイメージや取り扱っているものによって、オリンピックのスポンサーに適しているか否やということまで判断されている現実も知ることができた。(名古屋外国語大学・1年)
- ◆オリンピックといったスポーツの祭典で、多額のお金が動いていることがわかった。ビジネスの立場からすると、全世界の人々が注目し、多くの人動き、消費するため、絶好のビジネスチャンスであることは理解できる。しかし、一視聴者としては、純粋にスポーツを楽しむ平和の祭典といった考えからすると、ショックであった。また、パラリンピックに日本企業がスポンサーとなっていることに、とても誇りに思った。オリンピック委員会の腐敗に関しては、オリンピックのイメージなどを考え、IOCは行動をしてほしいと考える。(関西外国語大学・4年)

8/30(金)

比較文化論(受講言語:英語)

講師

神田外語大学 教授
矢頭 典枝Multilingual Club ファシリテーター
新条 正恵

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆矢頭典枝先生: 様々な英語を比較して違いを認識することはとても興味深く、一番印象に残った講義だった。先生が紹介して下さったサイトは英語を比較し、知識を増やすことに最適だと思うので、今後活用していきたい。(関西外国語大学・2年)

◆矢頭典枝先生: 多様な文化が存在する中で、自分の文化と他人の文化には小さなものから、大きなものまで様々な違いがある。その中でも、英語の発音、単語の違いについて理解した。英語と言っても地域、国によって様々な発音、単語表現があった。アジア圏では、英語の中にその地域の言葉を織り交ぜ使用している国もあった。同じものでも、表す単語が異なり、認識の齟齬が生まれるのではないかと思った。だから、英語を使う国にいった時、国ごとに単語が表すものを理解してから、若しくは現地を確認しながら通訳をしようと思う。(名古屋外国語大学・2年)

◆新条正恵先生; この講義を通して夢を実現させる方法を学んだ。私には将来必ず成し遂げたいことがあるが、先生に教わったコツをうまく取り入れてその夢を実現させたい。(神田外語大学・1年)

◆新条 正恵先生: この講義では、自らが将来やりたいことを中心に考え、その優先順位を決めた上でグループ内でアイデアをシェアする機会が設けられた。将来はなぜそれをやりたいのか、その後どうするのかを考えることで、自分自身の将来像やその可能性を大いに抱かせる、良い経験になった。これから先の人生においてもしっかりと自分の将来像を頭におき、夢を追い求め、やりたいことをできる限り多く見つけていきたいと思うようになった。(京都外国語大学・1年)

8/30(金)

通訳技法(受講言語:英語)

講師

神田外語大学 教授
小坂 貴志日英通訳・翻訳・ボイスオーバー
中曽根 俊

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆小坂貴志先生:この講義を通して印象に残った言葉がある。それは、「アスリートは言葉のプロではない。したがって、わかりやすいように話してくれるわけではない。英語を話すからといって、それがアスリートの母語とは限らない。したがって英語の間違いだってあるだろうし、聞き取りにくいことも多々ある。」という言葉である。私は通訳ボランティアをやる前からパーフェクトではなくてはだめだと思っていたが、もし文法が完璧ではないとしても、実践してみると八割以上は相手に伝えることが出来た。この講義を通し、通訳は体験を通して練習していくことが重要であると感じたので、今後はボランティアの機会があればどんどん挑戦していきたいと思った。(神田外語大学・1年)

◆小坂貴志先生:この講義では実際に通訳の模擬を3人1組で行い実践を通していかにわかりやすく話者になりきって相手に伝えるかということを学んだ。思っていたよりも難しく、通訳の難しさも知ることができた。(名古屋外国語大学・1年)

◆中曽根 俊先生:この講義を通じて、プロフェッショナルとは何かを学んだ。スポーツ通訳とは流暢な英語力はもちろん、スポーツの専門知識だけではなく、医療知識もとても大切なものである。中曽根 俊講師は、常に準備を怠らず、常に学ぶ姿勢でい続けることが大切だと教えてくれた。実際、既知の単語にも違う意味があるため、自分専用の単語帳を作っている。また、言語だけではなく、異文化を知り、その文化ごとの習慣に応じて表現の方法を変えている。この時代に英語を話せる人は大勢いる。そのため、英語の他にも常に何かを学び、成長することが大切だと学んだ。(神田外語学院・2年)

◆中曽根 俊先生:通訳という仕事の中にも選手に直接つく通訳者やメディア上での通訳など様々な形があると知った。テレビやインタビュー等で見かける通訳者に憧れがあり、どういった方法で通訳者として活動していけるのか知りたかったため、この講義はすごく良い機会であった。実際、中曽根先生もたくさんの努力をされて、通訳者として活動をされているとお聞きし、すごいと思った。言語の習得のために単語を調べ、自分の頭の中にいつでも引き出せるように日々の積み重ねを怠らないことが大切である。また、時間厳守など社会での基本や仕事をこなす姿勢、楽しむ姿勢を持つこともスポーツ通訳者としてすごく重大な事柄であると学んだ。どのようにしたら相手にうまく伝えたい内容を伝えることが出来るのか、そういったことも考えなければいけない。簡単に習得できる事ではないため、困難だと感じることもあると思うが、普段から意識して物事を伝える努力をしたい。(関西外国語大学・2年)

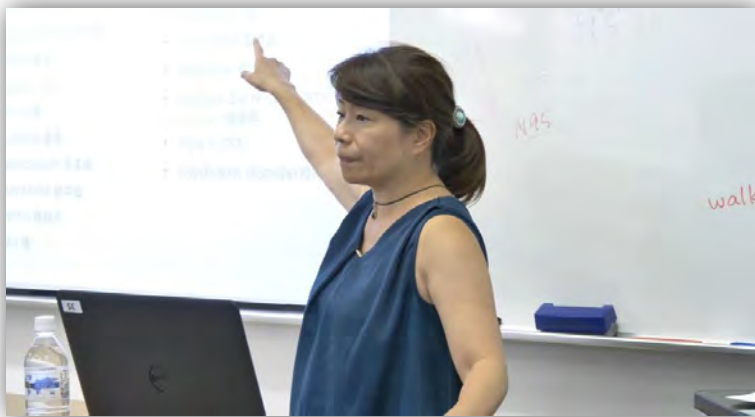
8/30(金)

医療通訳技法(受講言語:英語)

講師

南新宿整形外科 理学療法士
伊藤 博子

日英通訳・翻訳・英会話講師
大饗 里香



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆伊藤 博子先生:この講義では、医療現場での通訳について学んだ。医療現場での通訳は、高度であることを理解できた。まず、医療に関する知識を要すること、さらに、患者さんの社会的背景の知識や、患者さんの発言を正確に理解し、忠実に訳すことが不可欠である点において、非常に高度である。しかし、専門的な単語さえ理解できれば、比較的簡単な説明ができることを聞き、身近に感じることができた。(関西外国語大学・4年)
- ◆伊藤 博子先生: 通訳ボランティア中に起こり得る怪我の対応などのための医療通訳技法について行った。授業では学ばないようなさまざまな症状などの表現を学べたので実際に使えそうだと感じた。(神田外語大学・3年)
- ◆大饗 里香先生:医療通訳と聞いたときとても難しい印象だったが、自分が海外に行ったときや海外から来た人が病院に行くときだけじゃなく、日常会話のなかでも使うことができる表現や知らなかった知識を学ぶことができたのでよかった。また医療通訳の人手が足りていないという現状を知り、多くの人に医療通訳を知ってもらいたいと思った。(神田外語大学・1年)
- ◆大饗 里香先生:私は医療に関心があったのでとても良い学びとなった。スポーツの現場であれば医療の必要となる場面は必ずあると思うので、医療通訳の基本を学べて大変勉強になった。また、医療用語は専門的であるので知らなければ通訳できないため知ることができて良かった。痛みの表現方法は大きな違いを表すのだなと学んだ。また、この講義を聞いて、より詳しく医療の現場で使われる英語を知りたいと思った。
(名古屋外国語大学)

講師

神田外語大学 教授
花澤 聖子

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆日中文化について学んだ。互いの国の小さな文化の違いが親しい友人同士でも大きな誤解を生むことになるを知った。多国籍同士ではもちろんのこと、同国籍間でも互いを理解しようとする考えは大切だと学んだ。(神田外語大学・3年)
- ◆摩擦が生じやすい日中文化の相違 たとえば、漢字をめぐる相違点・コミュニケーションの仕方の相違点。これまで考えたことも無かったことをこの講義で知ることがとても良かった。(京都外国語大学・1年)
- ◆講義を通し、中国留学経験後に抱いた中国の文化、特に自己志向と他者志向について知ることができ、中国人の感覚と日本人の感覚を比較しながら理解することができた。(神戸市外国語大学・4年)

講師

大学セミナーハウス所属・
東京外国語大学兼任講師
孫 国鳳



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆この講義を通して孫先生の中国人側からの意見と先ほどの花澤先生の日本人側からの視点を両方短時間で見て考えることができた。
中国人は他人には何されるかわからないから信用しないという冷たい面が日本人に写る中国人だったが、本当は日本人よりも家族愛や親戚愛が強く、家族や親戚の為ならすごく自分の身やお金を削っても相手の為に尽くしたい民族であることがわかった。(関西外国語大学・4年)

- ◆通訳の仕事の重要性がよく分かった。何もかも通訳しないで、円滑に進むように仲介者の役割もしたというエピソードを聞いて、やはり通訳職はAIより人間がやる方がいいのだと感じた。(神田外語大学・1年)

- ◆通訳に興味を持つ前は、通訳の仕事を「ただ相手の言ったことを外国語に訳して伝えるだけ」と浅く考えていたが、語学の勉強を続け、通訳の経験をしてからは、通訳者には母国語・外国語の運用能力はもちろん、その他にも自国・外国の文化や習慣の違い、そして会話を円滑にするのを助ける能力も必要なのだと気づいた。場面や状況により、相手の言ったことを一字一句間違い無しに訳して伝えるべき場合もあるが、言葉や文化を異とする他人同士の会話や関係をうまく繋げる手伝いをするのが通訳者の役目だと今回の講義を通して改めて感じた。私にとって外国語である中国語の語彙や表現の幅を増やすことと、普段の生活や日本語での会話においても相手のことを思いや言葉や表現を選び、通訳の技術向上を目指したいと思った。
(神戸市外国語大学・4年)

講師

神田外語大学 准教授
朴 ジョンヨン

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆比較文化論という講義で、主に文化の定義について学ぶことができた。今まで文化とは何かということについて考えたことは無かったが、先生の文化とは人間が自分たちの生活をより豊かにするために工夫してきたものの総体という定義にはとても共感できた。また先生の講義を聞いてみたいと思った。(神田外語大学・1年)

◆人間の生活を豊かにするため工夫してきた総体的である文化、さらにはスポーツにおける文化とは何かについて学ぶことができた。共有性、学習性、蓄積性などを含むスポーツ文化が今の人間社会においてどれだけ重要な役割を果たしているか考えてみる時間ができた時間だった。(京都外国語大学・1年)

◆私が日頃考える視点からではなく別の視点からの考えを聞きなるほどなど感じる事がたくさんあった。これからのことを考えた時にとっても勉強になった。(長崎外国語大学・3年)

8/30(金)

通訳概論・技法(受講言語:韓国語)

講師

神田外語大学 講師
孟 信美



参加者課題『講義レポート』より

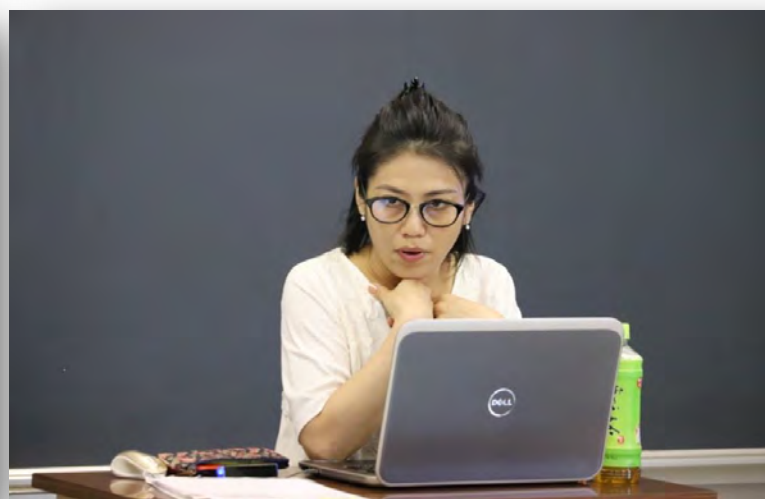
※編集の都合上,一部表現を編集しているものがあります

◆通訳ということで、この講義では主にオリンピックパラリンピックの用語を韓国語で学ぶことができた。また通訳ボランティアに必要な表現なども学ぶことができた。これから通訳ボランティアをする上で、活用していきたい。(神田外語大学・1年)

◆スポーツ競技の名称が国ごとに違うところがあるということは知っていたが、似ている語彙が多い日本と韓国が思ったより多い部分で全然違う表現を使っていることが分かった。通訳ボランティアをする時はもちろん知らなかった日本語の単語も学ぶことができた貴重な時間だった。
(京都外国語大学・1年)

◆たまに、日本とは違う表現をする韓国語が出てきて、通訳ボランティアをする上で専門的な単語などもきちんと勉強しておかないといけないなと思った。(長崎外国語大学・3年)

講師

神田外語大学 講師
本田 恵子

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上,一部表現を編集しているものがあります

◆映像通訳を行う際のルールなどを実際の映像を使って、考える事でより身近に感じることができ、自分の書いたものが画面に字幕として映るのが不思議だった。限られた字数で文化的な事も伝える難しさを知った。(関西外国語大学・2年)

◆この講義を通して、翻訳の世界の大変さを知った。実際に自分自身で適切な翻訳をしてみて、多くのことに気をつけながら翻訳していくのも大変だが、非常に興味深く、翻訳がどれだけ大変か知ることができたため、将来翻訳の世界にも興味が湧ききっかけとなった。(神田外語大学・1年)

◆翻訳は趣味でもよくしている方で、慣れているテーマだったが、講義で扱った映像翻訳は接したことのない分野だったので、新鮮な楽しさを感じることができた。映像が通り過ぎるたった数秒以内に、会話の中の多くの意味を含ませて送らなければならない映像翻訳の難しさを知った。(京都外国語大学・1年)

8/30(金)

比較文化論①②(受講言語:スペイン語)

講師

神田外語大学 教授・副学長
柳沼 孝一郎神田外語大学 准教授
アルセニオ サンス リベラ

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆柳沼孝一郎先生:この講義を通してラテンアメリカの基礎知識を再確認出来た。母校でもこのような授業は必須であり、スペイン語を学ぶにあたり、スペイン語圏の知識を知ることは必要不可欠であるとわかった。柳沼先生も、グローバル人材になるには、人間力とやはりコミュニケーションが大切であるとお考えである。(関西外国語大学・2年)

◆柳沼孝一郎先生:この講義を通して、中央アメリカ、南アメリカの民族・文化・歴史についていろいろなことが分かり、とても面白かった。私の主人がアルゼンチン出身なので、南米はアルゼンチン、パラグアイ、ブラジルは行ったことがあるが、先生の話聞いてメキシコ、ペルー、チリにも行って、マヤ文明やアステカ文明、そしてアンデス文明やインカ文明についても自分の目で見てみたいと思った。先生が言われた、90億人のうち9億人はスペイン語を話す人、という言葉は印象的だった。「分断されるアメリカ」「百年の孤独」という本は購入して読んでみたい。また、機会があれば先生の講義を受講したいと思った。言葉をはその国のDNAだから、言葉を学ぶことで、歴史や文化もわかってくる、と考えている。スペイン語は奥深いな、とさらに感じた。(神田外語大学・大学院生)

◆Sanz Rivera Arsenio先生:正しく翻訳されていない看板を見て明らかに違うものからまだ笑って許せるもの等様々あった。しかし、命に関わることなどはそれではいけない。そのためには、その言語の文化やニュアンスを知ることが重要だ。携帯などの翻訳機能はそのようなニュアンスまで訳しきれないので、AIに人間が勝てるのはそのような部分ではないかと考える。(神田外語大学・3年)

◆Sanz Rivera Arsenio先生:海外で売られている日本語の商品のラベルや、レストランの看板などでおかしな訳のものが多い。こういったものほとんどは機械で行われており、機械翻訳ではその場の状況や文化背景を汲み取ることは難しいため間違った意味になる事が非常に多い。また、日本の小説などを翻訳する際、まず英語に訳され、そこからスペイン語や他の外国語に訳されるというケースが多いが、英語に訳された際に間違いが生じると、そこから他言語に訳された時に更に間違いが増えていくので、直接訳す事が好ましい。日本の古典文学が好きなのでどのように訳されているか読んでみたいと思った。(京都外国語大学・3年)

講師

神田外語大学 講師
渡部 美貴

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆ニュース番組のリスニングを通して、翻訳の聞き取り(特に人名)の練習をした。何度も聞いて、訳される国や地域によって、実際の発音を使用するのか、それともスペイン語読みを使用するのか変わってくるし、漢字読みや表記についても国によって異なることが分かった。通訳で求められること、準備しなければいけない情報などについても改めてわかった。まだまだ自分は勉強不足だと痛感した。今回3つの専門語の講義を聞き、もっと勉強しなければしゃべれるようにはならないと実感した。単語力と覚えた単語を使う応用力の繰り返しすることは毎日しないといけないと思った。

(神田外語大学・大学院生)

◆通訳をするにあたって重要なことはまず、調べる事である。スポーツ通訳の場合は自分が通訳する選手の情報やスタジアムの場所などを事前に調べておかなければならない。次に、想定する事である。状況を想定して事前に調べる、そして受け手がどんな人物かを想定して通訳しなければならない。3つ目に、マナーとして人名はその国の呼び方で呼ぶというのがある。しかし母語が漢字読みの場合は例外となる。また、スペイン語圏ではニュースなどで著名人をスペイン語読みするケースも少なくないため、著名人のスペイン語読みを覚えておくと良いということも分かった。

(京都外国語大学・3年)

講師	神田外語大学 准教授 高木 耕	神田外語大学 准教授 奥田 若菜
----	--------------------	---------------------



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

- ◆高木 耕先生:カルチャーショックについての講義を聞いて、今後国際社会がますます発展していく中で異文化理解がとても重要になってくると感じた。カルチャーショックが起こる原因として異文化理解ができていないことによる偏見などが生まれることであると考え。そのため、間違った認識や、偏った情報というものをできる限り排除していくことが必要である。ただ現在メディアでは偏った情報しか流れていないのが現状である。そのため、私たち自ら少しずつでも学び、学んだものが発信していくことが重要なのではないかと考える。(神田外語大学・4年)
- ◆高木 耕先生:クイズを通して他国の魅力や我々が印象付けている大雑把なイメージではなく我々の知らない良さがたくさんあるということが分かったので実際に他国に行ったり他国の人と話をして他国をもっと知らなければならぬと思った。(京都外国語大学・1年)
- ◆奥田若菜先生:様々な場面の通訳者について学んだ。中でも取り調べや法廷での通訳者の立場が興味深かった。取り調べや法廷での発言はとても重要なもので、訳し方によってその人の人生が決まってしまうのである。医療通訳が増えない理由もこれと似たものだった。伝え方が間違ってしまうと違う薬を処方されたり、もしかしたら重い病気に気づかず死んでしまう可能性もある。トラブルの責任の所在が不透明なため医療通訳は少ないのだという。教育の現場での通訳も難しいものであるとわかった。また、通訳をするにあたって必要なことも学んだ。その中で一番大事だと思ったものは事前の準備だと考える。どんなに通訳に使う言語に優れていても通訳をする話題に関連する単語、専門用語のようなものは調べる必要がある。(神田外語大学・2年)
- ◆奥田若菜先生:奥田先生自身の目で見て体験してきたこととお話ししていただき、現実には教育問題などの面でも少しずつ改善されていることやこれからもっと進歩を必要とすることが見えてきた。医療に関することについても自分が必要とされる存在になりうるかもしれないと聞き改めてポルトガル語を勉強しようと思った。他にも、これから役に立つ情報をたくさんいただいたのでこれから役立てていこうと思う。(神田外語大学・1年)

講師

神田外語大学 講師
Gustavo Meireles

参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆この講義ではポルトガル語の通訳について詳しく学んだが、通訳の難しさを改めて感じさせられた。同時通訳と逐次通訳ではやり方が大きく変わるため、言語と同時に通訳についても学ぶ必要と感じた。また通訳する上での準備は必須であると同時に、その準備の仕方にも工夫が必要だということも学んだ。例えば、日本人の通訳であればあらかじめ原稿をもらえることが多いらしいが、外国人の場合原稿通りにいかないことが多いらしい。このように相手によってすら大きく変わってくる。このように通訳の難しさについて生の声を聞いたことは良かった。(神田外語大学・2年)

◆本講義では通訳する際に必要な語学力の付け方について述べられていた。シャドーウィングやスラッシュリーディングなどの練習方法は知っていたがリプロダクションやサイト・トランスレーション、ノート・テイキングなど初めて聞く練習方法があった。また、ブラジルの公用語であるポルトガル語でも地域によって、文法や発音などが異なる点がたくさんある。正しい文法を学ぶことは大切だが、地方の言語についても知識が必要であることが分かった。(神田外語大学・1年)

講師

チェロ奏者
リベラルアーツ塾ライシラム 代表
クリストファー 聡 ギブソン



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆この講義を通じて私は、音楽は時間を超えて文化を知ることができるものだと感じた。クリストファー聡ギブソン講師のチェロの音色はとても心地よかった。そして、作曲家により譜面の癖や音の癖があることもとても興味深かった。また、違う国の作曲家が書いた曲を違う国の演奏家が引くことにより、異文化交流が成される。このことから、音楽には国境はなく、世界をつなぐためには音楽は大切なツールだと考える。(神田外語学院・2年)

◆私はこの講義を通じて、音楽もスポーツと同じように世界共通言語なのだと気付かされた。この講義の受講前は、音楽とリベラルアーツは何が関係しているのだろうかという疑問に思っていたが、音楽もスポーツと同じように皆がそれぞれの方法で楽しむことができるものだという事に気付かされた。(関西外国語大学・2年)

◆懇親会での演奏からとても楽しみにしていた。私は小さい時からピアノと打楽器をやっていたので弦楽器はあまり馴染みがないが、チェロの音色が好きなので演奏を聞くのがとても楽しかった。テーマが音楽とリベラルアーツということで、講義の内容でも一番興味が湧いたのが、シェイクスピアの劇台本が音楽のように綴られていることだった。学校の授業で読んだことはあったが、このような観点から見ることはなかったので、印象に残っている。音楽は言語が通じなくてもお互いに楽しむことができ、それをきっかけに言語習得につながるという一石二鳥の分野なので、音楽に何かしらの形で関わってきてよかったと再認識させられた。(神田外語大学・1年)

8/30(金)

アスリートから学ぶ人間力

講師

日本フェンシング協会理事/JOCアスリート委員
2008年北京オリンピック出場
2012年ロンドンオリンピック男子フルーレ団体銀メダル獲得
文部大臣顕彰、河北文化賞、気仙沼市民栄誉賞等受賞
千田 健太



参加者課題『講義レポート』より

※編集の都合上、一部表現を編集しているものがあります

◆スポーツが人間にもたらすパワーの大きさを知る事ができた。オリンピックという世界の数少ないアスリートが出る大会でのメダルを実際に触れさせていただき、質的な重さだけではなく、色々な重みを感じた。自分も何かの分野で日本を、そして世界を活気づけられる様な人材になれたらと思った。

(関西外国語大学・4年)

◆講義の途中で千田先生が実際にオリンピックで勝ち取った銀メダルを触ることができたのが、一番印象に残っている。千田先生の選手生活や引退後の生活を通して学んだ人間力について話していただいて、私自身共感できる点もあったので聞いていて面白かった。

(京都外国語大学・2年)

◆親譲りとは言え、千田氏の人生はフェンシング一色だった。そして千田氏はそんな環境でも、フェンシングを心から楽しみ、身体的ハンディをものともせず、才能を開花させ、結果を出した。しかし千田氏をメダリストにしたのは、まぎれもなく東日本大震災であった。それまでは「オリンピックに出場するのが目標」だったのが、親友を震災で亡くし、練習を中止して地元の復興にかけつけ、その中で「自分ができるのはメダルを取る事」という目標を見つけたという話だった。「自分に人間力はない」と言っていた千田氏だったが、彼は、おそらく震災を通して強化した、大いなる人間力を持っていた。

(神戸市外国語大学・2年)

5. セミナーの様子(写真)



▲このような受付で受講者を迎えました



▲グループディスカッションの様子



▲1日目最初の特別講演後、鈴木大地スポーツ庁長官と記念写真!



▲時には体を動かすことで皆の距離も近くなりました。



▲2日目の懇親会で、仲良くなった皆とハイチーズ!



▲フェンシング銀メダリスト千田選手による3日目最終講義後、千田選手を囲んで集合写真。3日間お疲れさまでした!